



たぶん悪魔が

1977年/フランス映画

配給：マーメイドフィルム コピアボア・フィルム/97分

2022 (令和4) 年4月29日鑑賞

テアトル梅田

監督・脚本・台詞：ロベール・ブレッソン

出演：アントワヌ・モニエ
/ティナ・イリサリノ
アンリ・ド・モーブラン
/レティシア・カルカノ

👁️👁️ みどころ

日本では劇場未公開だった“フランスの孤高の映像作家”ロベール・ブレッソンの1970年代の傑作が公開！主人公は“自殺願望の美しい青年”だから、いかにもフランス風！彼の“終末論”は如何に？拳銃の扱いは如何に？

熱っぽい政治談議や環境問題への問題提起など、あの時代を反映した面白さはあるが、この虚無感にはアレレ……。ベルリン国際映画祭銀熊賞受賞への賛否を含め、あなたの評価は？

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

◆ゴダールやヌーベルバークの作家たちをはじめ、世界中の映画人に多大な影響を及ぼし、寡作ながら唯一無二の傑作を生み出してきた、“フランスの孤高の映像作家”ロベール・ブレッソン。そう聞いても、私には全然ピンとこない。だって、彼の作品として、『やさしい女』（69年）を知っているだけだから。

日本では特集上映などを除き劇場未公開だったそんな彼の『湖のランスロ』（74年）と『たぶん悪魔が』（77年）が、40年以上の時を経て遂に公開。これは必見！まずは『たぶん悪魔が』を鑑賞！

◆フランス文学では、マルキ・ド・サドが有名だし、フランス映画では『エマニエル夫人』シリーズが有名。また、フランスの詩人としてアルチュール・ランボーが有名だが、ランボーと聞けば、すぐに自殺（願望）に結びついてしまう。

しかして、本作の主人公シャルル（アントワヌ・モニエ）は、裕福な家柄の出でありながら自殺願望に取りつかれている美しい青年だが……。

◆本作冒頭、彼が出席する政治集会や教会の討論会のシーンが登場するが、そこでの議論はすべてフランス流(?)で理屈っぽい。しかし、それをいくら聞いても、シャルルの心は晴れないらしい。また、本作には、シャルルの親友で環境問題専門家のみシェル（アン

リ・ド・モーブラン) が熱っぽくアピールする姿が映像を伴って流れるが、だからどうだというの・・・？さらに、シャルルに寄り添おうとする2人の女性アルベルト(ティナ・イリサリ)とエドヴィージュ(レティシア・カルカノ)が登場し、シャルルと同じ時間を共有するが、それでもシャルルは死への衝動を断ち切ることができないらしい。

それはそれで仕方ないから、好きにすれば・・・。73歳にしてはじめてロベール・ブレッソン監督の本作を観た私は、つい、そう見放してしまったが・・・。

◆自然破壊が進み社会通念が激変しつつあった1970年代のパリを舞台に、自殺願望の青年シャルルが冷やかに見つめる“終末論”を描いた本作は、本国フランスでは18歳未満の鑑賞が禁じられたそうだ。2022年4月24日に決戦投票が実施されたフランスの大統領選挙では、4年前と同じように、中道の現職エマニュエル・マクロンが極右政党のマリーヌ・ルペンに勝利したが、その差は58.54%VS41.46%に縮まったから、フランスの分断と若者の孤立はより進んでいるはずだ。

そんな今の私の目には、本作に見る急進的な社会批判はむしろ当然だが、本作がシャルルを通して描く絶望的な内容は一体ナニ？この映画の、どこが、どう面白いの？

◆アメリカは自由に銃を売買することができる国だが、フランスは？恥ずかしながら、私はそれをよく知らないが、ある“冤罪”によって警察に連行された後、ますます虚無的になっていたシャルルが、あるきっかけで拳銃を手にとると・・・。

芥川龍之介の自殺は睡眠薬の多量摂取、太宰治のそれは愛人と共にした玉川上水への入水自殺だったが、さて、シャルルのそれは・・・？

◆本作の結末は予想通りで、ある意味あっけない“終末”だが、本作は国際的には“シネマトグラフ”の一つの到達点として高い評価を受け、第27回ベルリン国際映画祭で銀熊賞(審査員特別賞)を受賞している。私には本作はイマイチだが、あなたの評価は？

2022(令和4)年5月1日記